

付録：フランス政体変遷小史

これまでの章にはフランスの政体についての記述が多く出てくる。登場する数学者にも大きな影響を与えている記述があるが、革命から第3共和制の成立まで、短時間で政体が入れ代わり、わかりにくい。読者の便宜のためにの議会の編成を中心にまとめた。

【三部会 *Etats-Genéraux*(14世紀–1789)】 聖職者の第1身分と貴族の第2身分を特権身分とし、特権のない第3身分からなるフランスの身分制議会。封建国家の家臣会議が拡大したもの。課税徴収に協力するよう王の要請で招集されることが多く、絶対王政が確立すると不必要になり、1614年以降は開催されなくなる。革命直前に、貴族の要求とブルジョアジーの支持により招集が決められる。

1789年5月5日に開かれた三部会は、議決方式が身分制にそった形で行うのか、人数だけで決めるのかという点で最初から紛糾した。

【立憲議会 *Assemblée Nationale Constituante* (1789.7–1791.9)】 上記三部会の紛糾のため、第3身分の構成する第3部が自ら国民議会と唱え(6月)、7月9日以降立憲議会と改称し、憲法制定まで解散しないことを誓う(テニスコートの誓い)。

このとき王(ルイ16世)は議会を軍事力によって抑圧しようとし、それを切っ掛けとしてパリ市民の暴動が起こり、1789年7月14日バスチーユ監獄が襲撃され、議会の権威が確立する。

⁸ [訳註] 特にフランス革命以降のフランスの政治状況が目まぐるしく変化し、本文で述べられているフランス人の数学者たちの行動が理解しにくいことがある。この付録は、その行動原理を理解するために必要な最低限のフランスの歴史を、訳者がまとめたものである。

人権宣言を發布し、封建制を廃止し、立憲王政を樹立する憲法（1791年憲法）を發布する。

【立法議会 *Assemblée Nationale Législative* (1791.10–92.9)】 1791年憲法に基づき、1791年10月1日に成立。立憲議会の議員の再任を認めなかったため、議員の年齢が若返った。対外戦争を議し、戦争に突入するも、敗戦が相次ぐ。国民の不満が講じて、1792年8月10日のパリ市民の蜂起が起こり、王一家を幽閉、実質的に王権が停止した。それに伴い議会の機能が失われたので、国民公会の招集を議決して解散（1792.9.20）。フランス共和国が成立する。

【国民公会 *Convention Nationale* (1792.9–1795.10)】 1792年9月21日に成立。権力の主体によって3つの時期に分けられる。

1. ジロندان公会 (1792.9–93.5)
2. モンタニャール公会 (1793.6–94.7) 山岳党（モンタニャール）のロベスピエールの独裁。恐怖政治。
3. テルミドール公会 (1794.7–95.10) テルミドールの反動（クーデタ）によって成立。総裁政府を作るための1795年憲法を制定。

【総裁政府 *Directoire* (1795.10.27–1799.11.9)】 ブルジョアジー主体の、民主的で権力が集中しないように気を配った政体だが（たとえば、総裁は5人で、任期は1年など）、組織が非常に繁雑であり、内外の危機に機敏に対処することができなかった。いわば中道派の政府で、革命派も王党派も軍を用いて弾圧したため、次第に軍人の力が増していった。その危機を知った、エジプト遠征中のナポレオン（1769.8.15–1821.5.5）が帰還し、総裁政府軍を破って、総統政府が誕生する（ブリュメール18日（1799.11.9）

のクーデタ)。

【総統(執政)政府 *Consulat* (1799.11–1804.5)】クーデタの後、3人の総統が任命され、その後10年の任期を持つ3人の統領が任命される。どちらの場合もナポレオンが第1統領であった。1802年元老院はナポレオンを終身統領とする。ナポレオンが皇帝になるための国民投票が1804年4月に行われて、翌月皇帝になることが決まった。

【ナポレオン帝政 *Régime Impérial de Napoléon* (1804.5–1814.3)】国民投票により、皇帝となったナポレオンは、この年の12月に戴冠式を行い、ローマ法王の承認を受ける。革命戦争の継続とフランスの栄光の追究がテーマ。ナポレオン法典。

トラファルガーの海戦(1805.10.21)でイギリスに破れ制海権を失う。1806年大陸封鎖令を發布し、大陸経営に転じる。最盛期にはトルコ以外のヨーロッパ諸国が封鎖令に服す。次第にヨーロッパ全体の経済が悪化し、離反が始まる。封鎖令に違反したロシアに遠征し、50万人の戦死者を出す大敗を喫する(1812年)。その後敗戦が相次ぎ、ついに1814年3月パリが陥落し、捕虜となり、4月6日退位し、エルバ島に流された。

【第1期王政復古 *Restauration* (1814.4–1815.3)】ナポレオン帝政崩壊後、1814年4月1日タレーランの指導下で仮政府が成立。議会は新憲法を可決し、5月3日にパリに入ったルイ18世(ルイ16世の孫)がこれを承認して成立。原則として、財産の不可侵とナポレオン時代の行政制度を維持する。過激王党派がタレーラン等を排除して、稀有議会ができる(1814.8)。

【百日天下 *Cent Jours* (1815.3.20–6.22)】1815年2月26日エルバ島を脱出したナポレオンはパリに攻め上る。パリ入城から第2王政復古までのナポレオン政権のことを言う。ルイ16世の政治に対する不満に乗じたもの。6月18日ワーテルローの戦い

に破れ、19日パリに戻り退位する。その後ナポレオンは10月17日にセントヘレナ島に流され、そのまま1821年5月5日に50歳で生涯を終える。1世は退位するとき、フーシェとともに息子のフランソワ・ボナパルトを後継に指名し、名目上1815.6.22-7.7までこのナポレオン2世が帝位にあった。

【第2期王政復古 Retrauration (1815.7-1830.7)】ルイ18世(1814 - 24)が復歸。過激王党派の行きすぎを矯めるために王が稀有議會を解散(1816)、その後穏健王党派と過激王党派の権力争いが続く。王弟シャルル10世が即位(1824)。ブルジョワジーの反感から1830年7月に7月革命が起こる。王はイギリスに亡命。

【七月王政 Monarchie de Juillet (1830.7-1848.2)】ルイ14世の弟オルレアン公フィリップの5代の子孫であるルイ・フィリップ(Louis Philippe, 1773.10.6-1850.8.26)が、大商人たちの勢力に推されて即位(7月26日に「王国代理官」、8月7日に「フランス国民の王」に、議會によって任命)。最初はブルジョワ国家の姿に合わせて機能したが、選挙権は富裕層にしか与えられない。

種々の反対勢力に対抗するため、少しずつ反動政策を強めていき、自由主義者から見放されていく。外交上の失敗が大きく、国民の不満を抑圧する政策をとったため、1848年2月22-24日パリに暴動が起こり(2月革命)、王はイギリスに亡命。

【第2共和制 Deuxième République(1848.2-1852.12)】ブルジョアの寡頭政治の性格を持つ七月王政の後にできた、社会主義的な傾向を持つ政体。ブルジョワ共和派と社会主義共和派の対立の中、大統領ルイ=ナポレオン・ボナパルトのクーデタが起こり(1851.12)、翌年12月20日の人民投票により法的にも終焉。

【第2帝政 Deuxième Régime Impérial(1852-1870)】ナポレオン1世の弟オランダ王ルイ=ナポレオン・ボナパルトの第3子である、シャルル・ルイ=ナポレオン・ボナパルト(1808.4.20-

1873.1.9) は第 1 帝政崩壊後諸国を流浪していたが、第 2 共和制になって帰国、1848 年国民会議に選出され、同年 12 月に大統領に選ばれる。クーデタにより、政権奪取。

専制帝政期 (1852-67) と自由帝政期 (1867-70) に分かれる。50 年代はフランスの産業革命の完成期で、産業資本の発展と労働者の福祉に努力した。イタリア統一戦争への介入など外交の失敗が帝政の基盤を揺るがし、次第に自由主義的政策に譲歩。1870 年ビスマルクにプロシャとの戦争に引き込まれ、敗戦後ナポレオン 3 世は退位し、イギリスに亡命。

【第3 共和制 *Troisième République*(1870-1940)】 普仏戦争の敗戦によって解体した第 2 帝政後に成立した国防政府がプロシャと休戦 (1871)。議会在招集され、パリ・コミュンなどを鎮圧して、ブルジョア共和制の方向が定まる。1875 年第 3 共和制憲法が成立。第 2 次世界大戦まで比較的安定。ヒトラーによる敗戦後、その傀儡政権であるヴィシー政府 (*Gouvernement de Vichy*, 1940-44) が生まれる。

【第4 共和制 *Quatrième République*(1947-)】 第 2 次大戦終了後、1944 年のパリ解放以後、ド・ゴール政権とレジスタンス国民会議の代表者による臨時政府ができる。45 年の人民投票により新憲法制定が決まる。憲法議会は 46 年憲法を制定。翌 1947 年に総選挙をして、正式に成立、現在に至っている。